

ジョン・ステュアート・ミルの のキリスト教神學批判

——十九世紀中葉イギリスの『寛容』の思想
について——

鈴木純博

ジョン・ステュアート・ミルの宗教的諸見解について

資本主義がもつとも發展したイギリスにおいても、産業革命がほと終りをつげた十九世紀中葉においては、信教の自由、すなわち、思想・言論の自由が確立されたというほど明い社會ではけつてなかつた。

(註) 一八五七年、コーンウォール州で、キリスト教を攻撃した人間にたいして、夏期裁判がひらかれた。同年に、イギリスでは、三つの宗教的迫害事件がおこり、オールド・ベリーでは、無神論者が、公然と侮辱された事件がおこつた。

ジョン・ステュアート・ミル(一八〇六—七三年)は、彼の學問的・思想的見地から、宗教的自由のために、すなわち、思想・言論・良心の自由のために、これらの宗教的迫害者たちを公然と擁護し、彼らのために勇敢な闘争をした人々の一人であ

研究ノート

つた。

(註) ミルは、宗教的迫害のこれらの諸事件に憤り、匿名で、五通の公開抗議書簡を、當時のイギリスの定期刊行物のうえであきらかにした。ミルは、彼の友人、そして、最後に、彼の妻となつた。ハリエット・テラー夫人宛の書簡のなかで、彼の心からの激怒の感情を説明している。

John Stuart Mill: Autobiography. Modern Library ed. p. 74.

John Stuart Mill and Harriet Taylor. Hayek. London. 1951.

青年ミルにたいして、H・テラー夫人があたえた精神的諸影響のうちで、とくに宗教上のそれにおいては、右のハイエックの評傳を参照するかぎりにおいては、テラー夫人の宗教的信條は明確ではないが、ミルが、彼の宗教上の諸論策の發表・宗教的諸意見について、夫人宛の書簡で、不斷に彼女の同意をもとめているところからみて、ミル夫人とは、宗教的立場において、同一であつたとみてよいであらう。

ミルは、當時を、『憎悪すべき諸意見の保持者たちは、これらの憎悪すべき諸意見を表明する自由を論じ、再論する準備をつねに準備しなければならなかつた』と特徴づけている。

(註) John Stuart Mill: Autobiography. Modern Li-

brary. p. 74.

當時のイギリスにおける教會の位置は、『諸大學は、教會のしつとぶかく要心された領域であつた』と、H・ラスキがのべているように、國教(National Church)は依然として嚴存し、強力な位置をしめていたが、十八世紀的な寛容と樂天主義は次第に表退の傾向をたどり、國教の力もそれとともに衰弱の兆をみせて、時代は、宗教的懷疑主義にむかいつつあつた。

(註1) John Stuart Mill: Autobiography. Modern Library ed. "Introduction."

(註2) E. W. Watson: Church of England. chap. 7. p. 121.

J・S・ミルの父ジネームズ・ミル(一七三三—一八三六年)は、スコットランドの長老教會派(Presbyterians)の信條で教育されたが、『おさなくして啓示(Revelation)にたいする信仰を拒否し、道德の最大の敵として宗教をみなす』人間として成長し、『イングランドにおいて、宗教的信條をなげすむはしないが、しかし、けつして宗教的信條をもたなかつた人間』J・ミルの家庭にそだつた青年ミルが、宗教にたいして、生涯、否定的な態度をとり、宗教上の迫害に闘争したことは、自然であらう。

(註) John Stuart Mill: Autobiography. Modern Library ed. p. 34.

『わたくしは、宗教的信條に關しては、ある一つの否定的な

状態のなかで成長した。』

(註) ibid. p. 34

J・ミルは、宗教上の意見について、彼の親友、十九世紀初葉のイギリス最大の政治經濟學者ダヴィッド・リカルドウ(一七二二—一八二三年)におゝきな影響をあたえたが、ミルの宗教的な立場は、彼のもう一人の偉大な友、ジレミー・ペンサム(一八四一—一八三二年)からうけついでとおもわれる。J・ミルは、彼の生涯唯一の宗教上の論策を、一八二六年に、當時のイギリスの主導的な定期刊行物ウェストミンスター・レビュー誌上に發表しただけであるが、この短い論文のなかに、彼の宗教的自由に對する激しい熱情は表明されつくしている。

J・ミルによれば、『寛容』の思想は、『一般に通用している諸意見、あるいは、市民的・教會的な諸權威によつて是認せられた諸意見に良心的に反對する方にみちびかれるか、それに同意することを拒否するかする人々を、邪惡な、ひねくれた、あるいは、非難されるべきものとしてとりあつかわないようにわれわれをつつしませる道德的な義務の基礎となるような理由についてのある一つの完全な知識から生ずる寛容の諸原理』であり、

(註) James Mill: Principles of Toleration. 1826. p. 1

この寛容の基礎は、懷疑主義である。懷疑主義は、『信仰、あるいは、不信仰のいずれもの目的とはなりえなかつたある一つ

の對象^{註1}を意味し、信仰は、眞理を存在させうる力であり、眞理は信することによって存在しうる。そこで、『確信的眞理の存在は、宗教の擁護者にとって、懷疑主義にたいする新しい攻撃の武器である。』

(註1) James Mill: Principles of Toleration, p. 2.

(註2) *ibid.* p. 2.

すなわち、J・ミルによれば、『寛容』、『懷疑主義』は、宗教的信仰の基礎となる確信的眞理、市民的・教會的諸權威によつて是認せられた諸意見、これから自由な立場である。ととも、それは、『呼吸するがごとくに自由である』人間の存在を尊重する『寛容』の原理は、あらゆる偏見からの人間の解放を意味する。

(註) *ibid.* p. 9.

J・ミルによれば、社會のなかには、さまざまの偏見がある。すなわち、階級的に固有な優越性と劣等性。職業的な偏見。感情的な偏見。愛情の偏見^{註1}。これらの諸偏見は、『かたくなに利己主義と不道德の習慣』の結果であり、これらの諸偏見は、『社會の勢力ある諸階級の諸利害にとつて好都合な諸意見』の土臺石となっている。J・ミルによれば、『社會の諸階級』^{註3}にとつて敵對的な諸意見の分野であるこれらの諸偏見を打破する立場は、また、『寛容』の原理が意味するところである。

J・ミルによれば、『寛容』の思想の敵對者は、教會的諸權威の代表者、僧職者階級と社會的諸偏見をもつ貴族階級である。

研究ノート

したがって、彼らにたいするJ・ミルの批判は手厳しい。『生きている人々の諸階級のすべてのなかにおいて、僧職者は、信仰をもっともいちぢるしく缺いた人間である。』^{註1}ある一つの階級として、生きている人々のなかで最大の背教者である。』

しかし、J・ミルは、けつして無神論者ではなかった。彼は、寛容・懷疑主義の立場を、また、つぎのように表現する。『宗教に關しては、人間の選擇の事柄である。自己の宗教を選擇しない人間は、何ももたない。』

J・ミルは、宗教にたいする彼の見解を死ぬ最後の瞬間(一八三六年)まで、けつしてかえることはなかった。^{註4}

(註1) *ibid.* p. 30.

(註2) *ibid.* p. 30.

(註3) *ibid.* p. 30.

(註4) John Stuart Mill: Autobiography. Modern Library ed. p. 171.

(一)キリスト教に代表される宗教、すなわち、權威と自由との關係について

J・S・ミルによれば、大陸の自由主義の最後の世代、『自由の愛慕者たち』(The Lovers of Liberty)の目的は、『政治的支配者の壓制にたいする防衛』^{註1}となつてゐるが、これで自由主義の目的がついてはいない。人類の歴史は、宗教的自由を確立した人々の尊い努力でみちている。J・ミルによれば、宗教的自由を確立した人々は、『良心の自由を破棄しがたい一つの權利と

して主張した『人々であったが、寛容でないこと (Intolerantism) は、人類にとってひじょうに自然的であったために、宗教的自由はどこにおいても實現されなかった。』歴史は、迫害によって強壓された真理の實例に充滿している。宗教上の意見に ついても、宗教改革 (Reformation) は、ルター以前少くとも二〇回はおこつたが、強壓された。』

(註一) John Stuart Mill: On Liberty. 3 ed. 1864 年.

p. 8

(註二) Ibid. p. 52.

ミルによれば、近代的世界は、『宗教的な權威 (spiritual authority) と現世的權威 (temporal authority) の分離』によつて成立し、その結果、法と國家の、個人の私生活への干渉はできなくなった。それは、近代的人間の私生活の原理が、宗教のなかにもとめられるようになったことを意味する。『道徳的な感情の形成にくわつた諸要素のなかでもっとも強力なものたる宗教は、ほとんどつねに、人間の行爲のあらゆる部門への統制をもとめる一つの教階制度への野望か、ビュアリタニズムの精神か、そのいずれかによつて、支配せられてきた。』しかし、ミルによれば、政治的自由と宗教的自由は、けつして分離されて論じうるものではない。思想の自由は、本來、話すことと書くことの自由、つまり、言論の自由と同じ性質の自由であり、これらの自由は、『宗教的な寛容と自由な諸制度を公言する諸國』の政治的の道徳の一部分を形成する。言論を沈黙させるこ

とは、あやまりをおかしていないという假定を意味し、『それは、人類に強盜をはたらくことである。』

(註一) Ibid. p. 28.

(註二) Ibid. p. 33.

『不信仰者よりも、むしろ、信仰者を侮辱する』宗教的迫害をおこなう教權、すなわち、『集團的權威』にたいして、ミルは、批判する。

カソリック教會は、確信をもつて教理をうけとる人間と、それを信ずる人間とにわけ、僧職者のみが異教的な書物をよめるが、俗衆には許されないようになってゐる。プロテスタントは、ヨリ前進して、『一つの宗教を選択することにたいする責任は、おのおのによつて、自らとらなければならぬし、教師たちにおわせることはできない』と規定する點で、宗教的自由にヨリ接近している。

ミルによれば、宗教それ自體の思想と、宗教制度——教權は、區別される。『キリスト教的道徳とよばれているところのものは、キリスト、あるいは、使徒たちの作品ではなくして、カソリック教會によつて、段々と建築された。』人類が、キリスト教的道徳にひじょうにおつてゐることは否定しがたい」とみとめるミルは、キリスト教的倫理を、『高貴よりも、むしろ、潔白、善の精力的な追求よりも、むしろ、惡の抑壓』という消極的・受動的な性格として理解する。したがつて、キリスト教的倫理は、『本質的には受動的な服従のある一つの學說であり、確立さ

れているすべての權威の屈服をおしえこむ』危険をもってゐる。『キリスト教的道徳において公然とみとめられた唯一の價値は、服従の價値である。キリスト教的道徳は、ひじょうにおおくの人々・善意をもつ人々が現在長い間それを促進しようと努力しているところの道徳的な訓練と教訓をひじょうにきずつけ、ある一つの重大な悪としんじてゐる。』

キリスト教的倫理は、ミルによれば、『人間は、神の意志に従する能力以外に何らの能力も必要としない』と命令し、とくに、カルヴィンの理論は、『罪』をつぐなわなければならないほど人間性はひどく墮落しているのとべている。すなわち、キリスト教的理想は、『人間の性格のしめつけられた、偏屈な型にむかう傾向の發生』を結果としてもたらし、民衆をして、『しめつけられた・ちぢみこんだ人間を創造主の企圖とみなす』ようにしむける。

ミルによれば、『まったく排他的に宗教的な一つの型のうえで、精神と感情を形成することをこゝろみる』キリスト教的倫理は、イギリス産業ブルジョアジーの倫理的規準であり、階級的な性格をおびている。『ビュアリタンは、共和国 (Commonwealth) の時代において、ニュー・イングランドや大英帝國において、かなりの成功をもって、すべての公的な・すべての私的な娛樂を抑壓する努力をなしてきた。こういう人々は、この王國の現存の社會的・政治的な諸條件のなかで、すぐれた力をもっている中産階級に屬している。』(傍點は譯者)

研究ノート

- (註 1) *ibid.* p. 89.
 (註 2) *ibid.* p. 92.
 (註 3) *ibid.* p. 111.
 (註 4) *ibid.* p. 111.
 (註 5) *ibid.* p. 154.

すなわち、ミルは、『自由について』という政治的パンフレットにおいて、人間の自由の三つの分野、(一)意識の内面的な領域——良心・思想・感情の自由。實踐的・科學的・神學的なすべの主題についての意見と感情の絶對的な自由。(二)趣味と追求の自由。(三)個々の人間々での結合の自由。この三つの視點から、宗教的迫害を非難するとともに、『宗教的權威』と『現世的權威』の分離によって成立した近代的世界において、宗教的權威が、中世的教會のかわりに、ビュアリタンの・プロテスタントの倫理としてあらわれ、それが近代的政治社會と經濟社會において實權をにぎった中産階級の宗教的信仰となるにょよんで、キリスト教的倫理が近世的政治社會を支配するようになった。すなわち、『宗教的權威』と『現世的權威』の再結合、つまり、宗教——キリスト教的倫理の階級的性格、近代的政治社會の封建的宗教國家的側面を鋭く批判する。かくして、ミルは、『一つの權威として確立されたキリスト教の絶對的な精神的支配』から自由な立場、すなわち、『寛容』、『懷疑主義』の見地にたつ。

『現代は、信仰をかいてゐるが、また、懷疑主義におびえて

いる。』

(註) *ibid.* p. 42.

(二) 宗教の效用について——功利主義理論による宗教批判

ミルによれば、自然は、二つの重要な意味をもつ。すなわち、物理的自然と、『自然という言葉が、稱讃と是認、あるいは、道德的な義務の觀念をつたえる時』^{註1}の自然である。キリスト教神學は、自然を『それに神性をあたえ、行動の規準となす』自然神教的倫理學者の『自然を倫理學の標準に昇格させようとする』思考様式に反對する反動的性格をもっている。^{註2}自然神教的倫理は、キリスト教的神學の反動としてあらわれた一つの結果であり、これは、『思想と感情の氣質においてすぐれた要素をもち、近代的精神のなかにすぐれて浸透したルソー』^{註3}の感情的自然神教によってひらかれ、近世のキリスト教神學の色彩と情味は、これから借用されている。

(註1) John Stuart Mill (Nature, the Utility of Religion, and Theism). 1874. p. 8 初版、一八七四年・

二版・一九二三年・ニューヨーク一八七四年アメリカ版。

(註2) *ibid.* p. 10.

(註3) *ibid.* p. 11.

キリスト教神學は、道德的規準としての自然を改造しようとする人爲の力を、『諸神の復讐』でおびやかす、文明・技術の稱讃を、『自然の誹謗』とみなし、『改善は、宗教的にくまれる結果となった。』のである。

ミルによれば、キリスト教的神學は、自然を造物主の企圖によってできた秩序とみなして、自然に神性をあたえて、『自然を倫理學の標準に昇格させる』^{註1}だけではなくして、『人間の諸衝動を自然の秩序にいれ』、『その衝動を悪化し』^{註2}、そして、『理性をこえる權威』をさすけようとするのである。

(註) *ibid.* p. 44

ミルによれば、『信仰は、明白な論證によってよりも、信じようとする希望によって決定される時代』^{註1}である現代においては、民衆は、高貴な感情の源泉を宗教にもとめようとし、その結果として、直観哲學が流行し、形而上學が隆盛をきわめる。形而上學は、『宗教にとって都合な・偽證せられた證明の一つの薄い着物』^{註2}であろう。このような時代においては、問題は、『宗教の眞理性の證明』ではなくして、『宗教の有用性』が論議されなければならない。『最上の人間的道德の一つとしての光榮をうけた』宗教は、それ自體につきまとう有害な諸結果から解放されることがのぞましい。

ミルによれば、キリスト教神學の反動としてあらわれた自然神教 (Theism) も、ふかく分析されなければならない。自然神教を論證した人々は、ソクラテス、ペーコン、プラトーン、ロック、ニュートン、デカルト、ライブニッツ、である。直観哲學は、一般に、『人類の一般的な同意から、人間精神に固有な・神についての直観的な知覚をみちびきだし、信仰は眞理であるという結論をみちびく』^{註1}。デカルトの努力は、『神の知識を内面

的な光からひきだすため、直接の知覚作用とする諸努力^{註2}であり、カントにおける神の概念は、『神の概念は、その概念が人間精神の諸法則によって建設されたという意味において、精神に生え抜きのものである。』と規定している。彼らは、『経験から独立した理性的眞理から神の存在と諸屬性を證明する』ことをこゝろみている。カントにおいては、『道徳的感情は、精神の純粹な生長物であり、経験から独立した義務である』、『神の存在が、道徳的感情の必須な部分でないとしても、道徳的諸感情にあっては、神はのぞましいものである。』と規定されている。

ミルによれば、カントにおけるこの理性的證明方法は、『人間精神の外側のある一つの實在性を、この神がもつ』ということ^{註3}を究極において納得させることはできない。

(註) *ibid.* pp. 163~165.

ミルによれば、自然的諸秩序と人爲的な諸秩序との間の類似はかなり大きなものであるところから、この單純な相似性から、原因の類似性の推測が生れ、因果的な關係の推測が生れることは、一つの自然的傾向であろう。しかし、自然的諸秩序を、『ある知的な一つの意志にただちにむすびつける考え方』^{註1}は、あやまっている。すなわち、ミルによれば、自然的諸秩序と、その原因との間には、『介入すべき一つの環』がなければならず、この有機的な諸要素のある一つの配置・秩序を構成する原因として想定される『環』は、『進化法則』、すなわち、『生存闘争の法則』という『環』である。『知識の現狀においては、この

進化法則のみが、知性による創造によって好都合な・大きな可能性をあたえるのであり、自然神學の他の諸論證は、このような可能性をあたえない』と斷言できる。

つぎに、ミルは、神の諸指示、諸屬性を考察する。自然的神學の諸基礎からは、『全能』は、造物主の屬性であると斷言できない。自然的神學は、神は全能であることによって人間に神の意志を氣づかせるという理由から、神・『創造主』の意志をさぐるうとすることから、それは論理的矛盾であるとして、『神の全能』を否定するが、『神の全知』を神の屬性たらしめることは否定していない。

(註1) *ibid.* p. 173
 (註2) *ibid.* p. 173
 (註3) *ibid.* p. 174
 (註4) *ibid.* p. 181.

キリスト教的神學は、この『神の全知』という推定のうえにたっている。動物・植物界の構造、太陽系の構造は、一人の神についての證明をあたえ、信仰を確證する強固な證明とおもわれてきた。しかし、ミルによれば、宇宙の構造の驚嘆すべきことは、神の道徳的諸屬性の證明とはなりえない。『時間的消滅(太陽系の冷却)』をもつ宇宙の構造は、神の企圖の指示として、道徳的諸屬性とはなりえない。』だから、自然的神學が、『寛容は、造物主の諸屬性の一つである』と推論することはあやまりである。また、『創造の唯一の目的と目標は、諸創造物の幸福

である』と推論することもあやまりである。ミルによれば、神創造主に人間以上の力をみとめ、神の諸創造物、自然的諸秩序のなかに道徳的な規準をもとめようとするキリスト教的神學、自然的神學の一般的な考え方は、『進化法則』によって不斷に發生・成長・消滅する自然を、不變な・永遠な相において理解する點において、あやまりをおかしている。

『自然の諸配置のなかに、正義という道徳的な屬性をもとめることはむなし。正義は、人間社會に實現される人間自身の作品である。』(傍點は譯者のもの)

(註1) *ibid.* p. 181.

(註2) *ibid.* p. 192.

(註3) *ibid.* p. 194.

一切の宗教の究極的な基礎、『魂の不死』についての、ミルの分析は嚴しい。

『自然の光は、魂の不死、および、未來の一つの生活について何らかのある指示を與えるか。近代人は、魂を一つの實體としてではなくして、屬性とみなして、その不死を信じない。』
『不死については、何らの實證的證明も存在しない。精神を、身體から離れた一つの實體と假定することは、自由に對する諸拘束と、復活からの解放ではなくして、精神の諸機能を停止せしめることである。』すなわち、ミルによれば、『思想と、物質的な脳髓との關係は、何らの形而上學的な必然性をもつ關係ではなくして、それは、觀察の諸制限のなかにある不變な共存で

ある。』教師や支配階級は、利己的・公的諸動機から、死後の世界への信仰を奨励してきた。この信仰には、科學的・理性的根據はない。『不死への願望は、本能の願望ではなくして、生活の願望である。』

(註1) *ibid.* p. 196.

(註2) *ibid.* p. 198.

(註3) *ibid.* p. 199.

(註4) *ibid.* p. 204.

ミルによれば、魂の不死と同じく、啓示、つまり、奇蹟に對しても、批判はおこなわれる。『諸奇蹟に對してわれわれもつところのキリスト教と、および、あらゆる啓示的宗教の基礎を伴うところの證據それ自體の性質は、極端に不完全である。』

(註) *ibid.* p. 236.

ここで注意すべきことは、ミルの宗教批判の基本的態度は、『超自然的なものに對するある一つの思考する精神の理性的態度、つまり、信仰ならびに無神論から區別される懷疑主義の態度である。』(傍點は譯者のもの)

(註) *ibid.* p. 242.

人間の教育にとつて、宗教はどのような位置をしめてよいか。

ミルによれば、宗教に對する教育の關係は、きわめて重要な問題である。唯一の眞實の効果的な宗教的な教育は、父親による、家庭と子供の教育であるから、宗教教育の力は、極めて大

きい。

(註) On Education. Cambridge ed. 1931年. p. 185~6.

1865年。

『宗教は、いやしくも、諸大學と公共の諸學校で教えらるべきか——という長い・激しい論争』の解決は重大である。ミルによれば、『生徒は、あたかも彼の宗教は自分でそれを選ばなければならぬような人間のごとくに、彼のために選ばれたのごとくに話掛けられるべきではない』^{註1}のであり、『ある一つの大學の正しい仕事は、國教の諸教會と國教でない諸教會の諸學説を教えることではない』^{註2}(傍點は譯者のもの)のである。大學の正しい仕事は、『われわれに權威から、われわれが信すべき、そして、われわれをして、ある一つの義務として信仰をうけとらせるようにするところのものを告げることではなくして、萬難を排して眞理をもとめること、および、これらの諸困難を解決するもつとも満足すべき様式を發見するために、われわれ自身の信仰を形成することである』^{註3}「ミルによれば、『思想についての諸君の自由を安く手放してはならない』^{註4}であり、『大學は、自由な思索のある一つの場所たるべきである。』^{註5}

(註1) *ibid.* p. 186.(註2) *ibid.* p. 186.(註3) *ibid.* 187.(註4) *ibid.* 186.

研究ノート

婦人の隷従からの解放と、宗教からの解放とは重要な關係があること

ミルは、婦人の長い屈辱的な状態にあたえた宗教の影響について、つぎのようにのべている。『宗教は、服従の義務を課すると告げられている。教會は、その諸公式集のなかで、このような服従的命を課する。聖パウロが、妻たちよ！ 汝の夫たちに従え、といったが、キリスト教から、何かこのような命を引き出すことは困難である。キリスト教が、統治と社會の現存の諸形式をステロ版にし、これらの諸形式を變化に對して保護すること企圖したと要求すること、これは、キリスト教を、回教、あるいは、バラモン教の水準に引き下げることである。』^註すなわち、ミルは、ここで、婦人の隷従に及ぼす、原始的・野蠻な宗教の影響を指摘する。

(註) Subjection of Woman. 1869年. Oxford ed. p. 481

過去の一切の宗教から解放された人間は、『人間性の宗教』に立たなければならぬ。

宗教、とくに、キリスト教の一切の精神的支配から脱却した J・S・ミルは、知的・道德的判斷の基礎を、コント哲學がいう『人間性の宗教』(Religion of Humanity)にもとめる。すなわち、ミルがいう『人間性の宗教』とは、『知性の宗教』、『哲

學者の一種の共同的な教會制度^{ベイレグ}である。『僧職者の權力を、哲學者が奪取し、近代ヨーロッパの諸國民が、中世の諸時代において、現世的な力と精神的な力との分離をおこなひ、精神的な力の明確な組織化から歴史的に諸利益を引きだした』^註哲學者の一種の共同的な教會制度としての、コンテがいう『人間性の宗教』こそ、過去の一切の神學的宗教にかわる。『人間性の宗教』であろう。

(註) August Comte and Positivism. 1865. 4年。

むすび

J・ミルとJ・S・ミルの宗教批判に特質的なことは、産業革命がほゞ終りをつげた十九世紀イギリス資本主義は、まだ、現實において國家と宗教の分離という仕事を完成しておらず、イギリス産業ブルジョアジーは、その發端において、無神論の旗印をたかくかゝげたけれども、十九世紀初葉から次第に反動化して、僧職者階級の温存、政治的には、土地貴族階級との同盟によって、宗教的權威と現世的權威との再結合の基礎に立っており、彼らの批判がこゝに向けられたということである。J・S・ミルが、宗教批判において、匿名で著書を發表し、あるいは、死後出版の形をとったほど宗教の問題に敏感であったのは、産業ブルジョアジーが、ビュアリタンの倫理・道徳につらぬかれた中産階級であったイギリスにおいては、當然のことであろうし、それほど、イギリスにおいては、宗教と政治の再

結合は、強固なものであった。

J・ミルが『寛容の諸原理』で指向するところは、教會的諸權威——僧職者階級と、市民的諸權威——貴族階級批判であり、J・S・ミルは、この批判的自由主義の立場をヨリ發展させて、『自由について』では、本来の自由主義的見地は、單に政治的自由のみならず、宗教的自由を獲得する立場であることを明らかにし、キリスト教的倫理が人類の精神的發展に貢獻したことをみとめつつも、すなわち、イギリス中産階級のビュアリタンのプロテスタント的宗教信條の産業社會發展につくしたおいきな役割と功績をみとめつつも、ミルは、近代的世界の成立が、宗教的權威と現世的權威との分離によって成立したことをあらためて強調し、キリスト教的倫理がイギリス政治・經濟社會に支配力をもつにいたつたその現状、つまり、宗教と政治・經濟の再結合、すなわち、キリスト教的神學の階級的性格を批判する。

J・S・ミルの宗教批判のすぐれた諸點は、第一に、人間社會の倫理・道徳の基準を、キリスト教的神學の神の觀念、自然神教的倫理學の『自然の光』から、人間自身の手で奪取し、『人間社會に實現される人間自身の作品』として把握したことであり、こゝから、第二に、一八四八年のヨーロッパ大陸諸革命をむかえて、新しい社會的諸階級、労働者階級がえがく、未來の人間社會像がもつ、新しい倫理、社會的道徳をただちにみとめ、實成しうる、實踐的な『寛容』の立場、J・S・ミルの前進的

自由主義の立場が生まれる。そして、これは、また、婦人が、男子と平等な市民的諸権利をもつ諸根拠を、宗教、とくに、原始的な・野ばんな宗教からの解放に、その一つとしてもとめた、ミルの婦人解放思想が、新しいエトローピア社會の輝く功績とかんがえる理由も、こゝでむすびつくのである。

宗教大學としての、その發生において決定的な性格をもつイギリスの大學教育のあり方として、自由主義的教育理論は、宗教々育を正しい大學教育課程にはふくまれないと指摘したことは、ミルの宗教批判のすぐれて革新的な側面であらう。

明治以來、J・ミルとJ・S・ミルの諸思想は、おおくの社會思想家によつて紹介されてきたが、彼らの宗教批判の點については、企圖的にか、あるいは、見おとされたのか、そのいずれにせよ、まったくふれないまゝに現在にいたったことは、これらの紹介者たちの宗教的信條、ヨーロッパ先進諸國の啓蒙的思想がわが國に輸入されるうえの、さまざまの歪曲、すなわち、近世日本社會の特質上、重要な關係があることが、とくに注意されなければならない。